静岡の茶とみかん
―起源から殖産興業まで

静岡県教育委員会東部教育事務所
義務教育課指導主事
土屋　辰義

一、茶とみかんの起源

駿河の国や遠江国に茶が栽培されるようになったのは、けっして古いことではないようである。しかし、伝承によれば奈良時代にすでに自生茶が飲用に供されていたという。

聖武天皇の時代、安倍川中流の足久保（現静岡市）にやってきた行基が、老木に観音像を刻んでいると、毎日近くの老婆が湯を振る舞ってくれ、それを飲むと気分爽快になった。理由を尋ねたところ、近くの山中に自生する木の若芽を摘んで日に干し、毎日飲用しているとのことであった。この自生の木が茶の木で、この地方の茶の起源はこの時までさかのぼることができるといわれる。

一方、平安時代の初め、弘法大師らが唐から種を持ち帰って植えたのがわが国の茶の始まりで、実際に栽培されるようになったのは鎌倉時代に栄西禅師が建久二年（一一九一）宋の留学からの帰国の時に種を持ち帰ったのが始まりだといわれている。

静岡のお茶は、静岡市栃沢（旧安倍郡大川村）生まれの聖一国師が仁治二年（一二四一）宋から持ち帰った茶種を静岡市足久保に植えたのが起源だと言われている。

みかんの原種は、古くから日本の暖かい地方に自生していたたちばなであるといわれる。

たちばなは、古くは『魏志倭人伝』に倭国の山野に自生する樹木として記されている。また聖武天皇の時代、京都の紫宸殿に「右近の橘左近の桜」が植えられていたことはよく知られていることである。

このたちばなは果実が小さく、酸味も強く、生で食べるには適さないが、薬などいろいろの用途に供されていたようである。

それ以後、中国大陸を中心に、海外から新しいさまざまの柑橘が導入され、数多くの品種が現在に伝えられている。

その代表的なものとしては、奈良時代、田道間守（たじまもり）がだいだいを伝えたと『古事記』に見え、神亀二年（七二五）こうじが唐から伝来していることが『続日本記』に記されている。降って、鎌倉・室町時代に小みかん（紀州みかん）ときんかんが中国から入ってきている。

これら、こうじ・くねんぼ・小みかんの三品種が当時の重要な生食柑橘として明治以後温州みかんが出現するまでの長い間人々に愛好されていたようである。

二、生産のひろがり

平安時代には貴族だけのものであったお茶も、鎌倉時代の「茶の湯」の普及とともに茶園もしだいに拡大され、折からの禅宗の広がりにつれて武士階級、僧侶の間に浸透していくことになる。

しかし、茶の生産が農業生産の一つとしてある程度形を整えてくるのは、幕藩体制社会になってからである。

慶長年間（一五九六～一六一四）駿府城にあった家康に献茶をする村があらわれたことも、当時の状況を示す事実の一つである。

安倍郡井川村（現静岡市）は大井川の水源地帯に開けた山村で、米・麦の生産

は行われず、ひえや粟を主食にしている所であった。こうした山間部の村々の「年貢割付状」に茶が年貢として納められた事実が記され、茶の生産が法的に確認され、年貢収取の対象とされたことによって生産も急速に発展した。

慶安二年（一六四九）に出された「お触書」で、幕府は「酒茶買い飲み申すまじく候」と述べ、さらに「大茶を飲む女房を離別すべし」とあるが、これは幕府が農民の喫茶の習慣を物見遊山と同じぜいたくととらえていることを示している一方で、庶民の間に煎茶の風習が広がってきていることをも示している。

小みかん（紀州みかん）が静岡県に伝えられたのは、秀吉が家康と共に興津清見寺に植えたことに始まるといわれる。

駿府公園内（旧駿府城）の家康手植えの小みかんを始めとする説など、それ以外にも諸説があるが、明確な史料をもたない。

今日一般にみかんといえば、それはすべて温州みかんを指しているといってよい。この温州みかんが静岡県で最初に植えられたのは安政年間で、志太郡岡部町である。しかし、温州みかんは唐みかんと呼ばれ異端視されたり、また核なしみかんで子種なしなど忌み嫌われたりして、優秀品質だったにもかかわらず、明治維新以後の驚異的な台頭を見るまであまり広まることがなかった。

三、産地の成立と発展　殖産興業

今日の静岡県内の茶の有力産地は一七世紀までに成立しているが、当初はいずれも自給用として始められ、需要の増大に伴い商品生産化してきている。

静岡茶の栽培が商品生産として本格的に始まったのは明治になってからである。

安政六年（一八五九）開国・横浜開港とともに日本茶の輸出が始まった。欧米の先進資本主義国が農業国日本に求めたのは、アジアにしか産出しない生糸と茶であった。幕末期の日本の輸出品の首位は生糸で、平均して輸出総額の半分以上を占め、続いて茶が二〇％内外を占めた。

開港当時の輸出茶は静岡を中心に、古くから国内向けに生産されていた手づくりの上質茶で香味品質ともに優れ、海外で高く評価され、高価に取り引きされた。

従来、国内市場だけに限定されていた茶が突然高値で大量に輸出されるようになったことは、流通面はもちろん、生産面にも大きな影響を与え、にわかに茶ブームが起こり、大規模な茶園ブームが静岡県を中心に始まった。その代表的なものが中条景昭を中心とする徳川藩士二百名による牧の原台地の開拓である。

これに遅れること約二年、明治四年六月、遠州池新田村（現浜岡町）の豪農丸尾文六らの指導で東海道金谷宿の川越人夫三十三戸が入植し、二百四町歩の土地の開拓を始めた。

しかし、士族や川越人夫によって開拓された牧の原開拓を継承し拡大していったのは、結局のところは豊富な経験をもつ周辺部の一般農民だった。彼らは茶の有利さに着目し、牧の原に残された土地へ、明治初年代から進出、十年代後半からは脱落していく士族達の土地を併合して、その経営規模を拡大していったのである。

引佐郡気賀村（細江町）の気賀林らによる三方原開拓も明治二年から始まり、現在に及んでいる。また、富士茶の名で知られる県東部の茶所愛鷹（あしたか）山麓から富士山の南麓の開拓もほぼ同時期であった。すでに新山茶の名で知られつつあった有度山麓の茶園造成も急速に進められ、茶輸出の増大を背景に静岡茶の産地は従来の山間部に加えて、交通の便のよい平坦部にまで広がっていった。

一八六八年江戸幕府の滅亡とともに、それまでの封建的農村社会にも新たな風が吹き込むことになり、さまざまな変化をもたらした。

各藩の特産物の独占、土地売買の禁止、作付作物の制限などが撤廃され、士族の帰農が続く中で温州みかんは新たな期待の下に農村に登場した。

そして県下各地の先覚的な農民リーダーが広く栽植を奨励し、着々と普及し、産地を形成していった。

●参考文献
『静岡県柑橘史』静岡県柑橘販売農業共同組合発行
『静岡県の歴史』若林淳之著・山川出版社発行
『生活を奏でる茶』お茶と生活文化研究会著・第一法規出版社発行
『静岡県農業のすがた』静岡県農業水産部農政課